様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２１ 日現在

機関番号：３５３０５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６３７０３４８

研究課題名（和文）19世紀アメリカ文学にみる隠喩としてのトランスヒューマニズムに関する学際的研究

研究課題名（英文）Interdisciplinary Study on Transhumanism as a Metaphor in 19th Century American Literature

研究代表者
中村　善雄（Nakamura, Yoshio）

ノートルダム清心女子大学・文学部・准教授

研究者番号：００３６１９３１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、テクノロジーの進展が19世紀のアメリカ作家（ナサニエル・ホーソーンやヘンリー・ジェイムズ等）に与えた影響と、その進歩が彼らの作品の中で、男性／女性、無機物／有機物、自然／人工といった二項対立を攪乱していく過程を考察した。その上で、この境界喪失から生じたトランスヒューマン的イメージ（サイボーグや有機的なオートマタ等）に焦点を当て、そこからテクノロジーと人間の関係を検証し、オルタナティヴな作品解釈の可能性について検討した。

研究成果の概要（英文）：This research examines how the advancement of technology influenced 19th century American writers and contributed to the deconstruction of binary opposition between male and female, organic and inorganic substances, and nature and art residing in their works. Focusing on transhumanistic images, specifically cyborgs and organic automata, arising from their binary loss, the study considers the relationship between technology and human beings, and offers alternative readings of various works.

研究分野：英米文学

キーワード：英米文学　オートマトン　怪物　サイボーグ　ポストヒューマン

１．研究開始当初の背景

1997年2月に発表されたクローン羊ドリーの誕生、翌 1998 年のヒトＥＳ細胞の樹立成功のニュースは、生命科学の新たな幕開けを告げる出来事であった。このエポックメイキングな発表を契機に、生命倫理に関する諸問題を検討する必要性が生じ、アメリカでは2001年にジョージ・W・ブッシュ大統領政権下において「大統領生命倫理評議会」が設置された。哲学者、法学者、医師ら総勢 17 名によって構成された評議会は、生物学者で倫理学者でもある座長Leon Kass主導の下、生命倫理に関する様々な問題を検討し、2003年に一つの報告書が出版された。それが *Beyond Therapy: Biotechnology and the Pursuit of Happiness* である。その報告書が文学研究者にとって興味深いのは、人間のクローン問題を検討する「最初のテクスト」として、カスが Nathaniel Hawthorne の短編“Birth-mark”を取り上げたことである。

現代のバイオテクノロジー問題を議論する口火として「痣」が俎上に載せられたことは、「痣」が現代科学の問題と通底するテーマを内包していることを物語っている。この視点は作品執筆時の時代性や作者ホーソーンの作品意図を無視する危険性を孕んではいるが、同時にこの小説に現代的意義を見出す契機ともなり得る。また科学技術がＳＦ的世界の実現と比較されるまでに進展している現代―例えば 2045 年に人工知能が人間の能力を超えるという Ray Kurzweil が予測する技術的特異点がまことしやかに語られる―において、ＳＦ的世界を射程に入れることはホーソーン文学の現代性の解明に寄与するであろう。この考えを基盤にホーソーン作品のみなならず、19 世紀のアメリカ文学をSF的に読み、そこからトランスヒューマニズム的イメージを抽出し、その視点からオルタナティヴな読みの可能性を探ることができないかと考えたのが本研究の発端である。

２．研究の目的

本研究の目的は、19 世紀中葉からアメリカに導入されたテクノロジー文化に対するアメリカ作家たちの受容形態を踏まえた上で、テクノロジーの進展によって惹起される男性／女性、有機物／無機物，内／外、自然／人工といった境界喪失から構築されるトランスヒューマニズム的イメージ（具体的にはサイボーグや有機的なオートマトン）を作品から抽出し、テクノロジーと人間との関係を考察することを主眼とする。それによって、19 世紀のアメリカ文学に登場するオートマトンや、「怪物」的なサイボーグが単なるロマンス的想像力によって構築された創造物ではなく、今日の（バイオ）テクノロジー論的視座からすると、現代の科学技術が行く着く一つの未来を予言し、同時にテクノロジーが人間の身体や意識に多大な影響を及ぼすことを明らかにしようとした。

３．研究の方法

研究方法

基本的な研究方法は国内外にて資料収集を行い、原稿を執筆し、それを学会あるいは研究会にて発表し、他の研究者のアドバイスや意見を参考にして、フィードバックを行い、最終的には学術論文あるいは共著という形で研究成果を公開した。以下はその具体的な内容及び手順である。

(1)当該研究テーマの検討に関連するアメリカ文学作品及びトランスヒューマニズムに関する図書を購入すると共に、作家のテクノロジーとの関わりを歴史的側面から考察するために書簡、伝記等の図書を購入した。

(2)絶版の図書や購入が困難な図書、あるいは本務校に所蔵されていない雑誌論文等を入手するために、国立国会図書館を初めとする国内主要大学にて資料収集を行なったり、本務校の複写サービスや図書賃借サービスを利用して、資料収集に努めた。

(3)国内では入手が困難な一次資料の収集及び当該課題に関する直接的検証については海外（研究機関）にて行った。
①2014年の夏季休暇時には、ハーバード大学のホートン図書館、ワイドナー図書館を中心に一次資料の収集に努め、その資料を基に図書館内にて「機械身体の考古学―ナサニエル・ホーソーンとテクノロジー」（『関大英文学―坂本武教授退職記念』）（2015）の原稿執筆を行なった。
②2016年8月にも夏季休暇期間を利用して、ハーバード大学のワイドナーを初めとする図書館にて、対象作家と当該研究課題に関する一次資料の収集を行なった。

(4)研究の諸段階において、研究成果をエコクリティシズム研究学会及び文化関連学会にて発表し、他の研究者からの意見やコメントを参考にフィードバックを行い、論文に修正・変更を加え、さらなる内容の充実を図っていった。

４．研究成果

(1)19世紀アメリカと機械論

19世紀初頭の機械文明，特に鉄道導入前のアメリカは，未熟で，バラバラな国家身体の様相を呈していた。Leo Marxによると，Thomas JeffersonやTimothy Walkerらの機械導入推進者たちは蒸気機関や鉄道がバラバラであった都市と田舎，東部と西部との繋がりを図り，アメリカを膨大な一つの織物とし，国家身体の統一を図ろうとした。このテクノロジーによって国家身体を統一する試みは，個の身体のレベルでは同じ 19 世紀初頭に登場したMary Shelly作 *Frankenstein or the Modern Prometheus*（1818）にて具現化されている。

それは墓場から掘り出された死体の断片をつなぎ合わせ，創造された一つの怪物であり、「半人間/半機械」と称され，機械文明による統合の表象として取り扱われた。

同時にその怪物が正反対の、つまり分断のイメージを喚起する点にも着目すべきである。フランケンシュタイン博士が自ら作りだした怪物によって殺戮される事実は，身体の物理的な分断を表している。また、創造者が制御できないほどの力を被創造物が備え，被創造物と創造物の間の関係が逆転し，それによって創造物が報復される象徴として機能し，絶えずその恐怖に怯えるという「フランケンシュタイン・シンドローム」を生み出した。

この機械文明による分断と、創造主が報復されるイメージをアメリカン・ルネサンスの作家はいち早く問題視している。H.D. Thoreau は，“Civil Disobedience”のなかで「我々が鉄道に乗るのではない，鉄道が我々の上に乗るのだ」と記し，創造主と被創造主の立場の逆転を予見している。Nathaniel Hawthorne は *The American Notebooks* において，バークシャーの工場を訪れた時に受けた、人間を圧し殺戮する機械文明の恐ろしきイメージを生々しく伝えている。

さらに，機械制工業は，ブレイン／ブローンに代表される人間の役割の分節化をもたらした。短編“The Birth-mark”では、エイルマーとアミナダブの関係がそれに相当し、前者がブレイン（brain）で，後者がブローン(brawn)の関係にあるといえる。エイルマーの小さな家内制手工業的な実験室がいわば，機械の台頭によって，階層化と分業制によって労働者が同じ作業の繰り返しを強いられる近代の工場制度のイメージを孕んでいるのである。

以上のように、19 世紀アメリカの機械文明が国家／個人の身体へ及ぼす影響には分断と結合という，相反する力学が駆動している。

(2)Hawthorne と機械論、オートマトン

Robert Boyle が主張した「時計じかけの宇宙」というモデルは宇宙をひとつの大きな自動機械とみなし、自然界に存在する個々の事物も正しく組み合わせることで、世界を再構成できるという考えである。宇宙のなかの人間・生物も同様に機械仕掛けと見なし、地上の生物の模倣を試みた結果、生み出された産物の一つがオートマトンである。このオートマトンは 18 世紀後半から 19 世紀初頭にかけて隆盛を極め、その間にフランスの技術者 Jacques de Vaucanson の、排泄機能までも備えていたと言われるアヒルのオートマトンや、ハンガリー人の Wolfgang von Kempelen の「トルコ人」と名付けられたチェスをする自動人形、スイスの時計職人 Pierre Jaquet-Droz の、自動で文字を描く「物書き」や自動演奏する「音楽家」といったオートマトンが発明された。

アメリカン・ルネサンスの作家もこの自動人形に興味を抱き、各々作品を発表した。Edgar Allan Poe の短編“Maelzel's Chess-Player”に出てくるオートマトンは、ケンペレンのチェスをする自動人形を主題としている。Herman Melville の“The Bell-Tower”では、主人公の機械師バンナドンナによってバベルの塔に匹敵する鐘楼の建造が試みられ、時を知らせるために「人間の奴隷」となるべき 12 体の乙女のオートマトンが登場する。これらのオートマトンはいずれも人間の身体的動作を模倣したものであり、René Descartes の言う、精神と身体を二分し、その身体を機械仕掛けと考える動物機械説に則った自動人形である。

一方、短編“The Artist of the Beautiful”においてホーソーンの生み出した蝶のオートマトンはそれらとは次元が異なる。それは自然の蝶の外見や外的動作を完璧なまでに機械的に模倣したオートマンであるが、それだけに留まらない。このオートマトンは「精神のエキスを吸収」し、「人間の魂と同じように、責苦を蒙る」「この上ない感受性」を持ち、明らかに従来のオートマンとは異なる性格を有している。制作者オーウェン自身が夢想した「新しい種類の生命と動き」を具現化した自動機械であるとも表されている。

生命現象を説明する立場として、伝統的に機械論と生気論という二つの考え方が存在する。前者は精神をも含めた全てを機械によって再現できるという考え方であり、後者は生命の営みには生気という非物質的存在が介在し、それは機械によっては再現できないという考え方である。鷲津浩子が指摘しているが、主人公であるオートマトン製作者オーウェンはその製作にあたって、「美という精神に形を与え、それを動かす」ことを目指し、「精神の物体化」（“materialization of spirit”）を試みている。オーウェンの企ては美、精神、生命までも含めた非物質的存在の機械による再現であり、機械論の極致といえる。ポーやメルヴィルの作品に登場するオートマトンがあくまで身体を機械で代用する段階に留まるのに対し、ホーソーンの生み出した精神・生命をも機械によって写し取る蝶のオートマトンはデカルトの身体／精神の二元論を超越し、身体と精神のいずれも機械工学的技術によって具現化する試みに繋がる。これを踏まえて、Klaus Benesch は、特にホーソーンのオートマトンを現代の科学技術との広範な関係性を有したサイボーグの現代版であると指摘している。同時代人であるポーやメルヴィルのオートマトンが二元論を超越することがなかったのに対し、ホーソーンのオートマトンはデカルト的二元論の再癒着を促す可能性を内包する点において、より現代的と言える。

ホーソーンがこうした境界撹乱的なイメ

ージを抱くのは彼の文学的スタンスが寄与していると考えられる。ホーソーンは周知の通り、*The Scarlet Letter* の序文に当たる“The Custom House”において、見慣れた事物が月光に照射されることで、「現実世界」と「おとぎの国」、「現実的なもの」と「想像的なもの」とが生じ、それらが重なり合う境界地帯を“a neutral territory”と定義し、その「中間領域」がロマンスにとって格好の舞台となると述べた。その「中間領域」を文学的主題とするホーソーンであるならば、人間／機械、自然／科学といった境界を問題視することはむしろ当然であろう。「現実的なもの」と「想像的なもの」が接触するホーソーンのロマンスの領域は、「人間と機械の混合体」あるいは「自然と科学の混合体」といった境界線上に立ち現れるサイボーグ的存在を生み出すための格好の土壌とも言える。

(3)「痣」における人工美女創造の夢

短編「痣」のなかでサイエンス・フィクション的要素を含む人物を挙げれば、「ヒューマン・マシーン」(51) と称された、科学者エイルマーの助手アミナダブが挙げられる。彼はまた「ヒューマン・マシーン」と共に、「土塊の人間」(“man of clay”) と称されている。「土塊の人間」はユダヤ教伝承のなかの、粘土を捏ねて人形の姿に形作り、命を得るとされるゴーレム（golem）を容易に想起させよう。ゴーレムは *OED* によると、広義の意味で人型の「オートマトン（自動人形）やロボット」を表し、この言葉は「ヒューマン・マシーン」のイメージと重なりあう。アミナダブを表象するこの二重の隠喩は、いずれも彼がサイボーグ的存在であることを物語っており、同時にこの二つの形容は、オカルティズムに基づく神話的な人間創造と機械による人間創造の両方のイメージを接合するものである。

アミナダブへの隠喩が明確なサイボーグ・イメージを誘発するのに対し、女主人公ジョージアナのサイボーグ的側面に対する明白な表象はない。しかしジョージアナの痣の除去は人工美女創造の神話と結びついている。ジョージアナを完全な美女に変える実験に対して、エイルマーは「ピュグマリオンでさえ私ほど狂喜しなかっただろう」と表し、自らを神話的人物に準えている。オートマトンやアンドロイドなど明白な人造人間創造の物語と、痣の除去による完璧な美女の創造物語を同列に扱うことは早計であるが、ピュグマリオン神話と重ね合されるエイルマーの実験は、人工的な人間創造と近似した営為と言える。

ジョージアナのサイボーグ的イメージは、アミナダブが人間／機械の境界の産物であったように、彼女もまた境界を巡る所産であることから喚起される。彼はジョージアナの痣を自然の偶発性・不完全性と捉え、その自然を男性＝科学によって克服し、不完全さを統一性というマスキュリンな範列に服属させようと試みている。エイルマーの行為は女性の身体の書き換え行為と共に、自然の書き換え行為とも言える。ピュグマリオンは女神アフロディーテによって人工美女の創造を果たしたが、エイルマーは科学者として、また一種の創造主として、自然／人工の境界を超越し、女性＝自然の書き換えを試みたのである。ハラウェイによれば、サイボーグは自然／文明、有機体／機械、男／女といった西欧二元論の「境界闘争」による産物であるが、これに倣えば、自然と人工の二項対立を解体しようするエイルマーの試みは、サイボーグ的想像力に囚われたものに他ならない。

(4)「ラパチーニの娘」におけるバイオテクノロジー的身体改造

サイボーグ的イメージを内包する女性というモチーフは、ホーソーンの短編「ラパチーニの娘」においてより顕在化している。主人公の若き娘ベアトリスは同種療法の言説に倣いながら、毒と共に育つことで、毒に耐性をもつ「毒娘」となり、「怪物」と表象され、父ラパチーニ博士の手によって身体の基本的規範を人工的に逸脱させられている。彼女が世話する庭の花も「人工的な外観」を有し、「もはや神の創造物ではなく、人間の堕落した空想から生み出された奇形な申し子」と表され、「コントロールされた遺伝子的実験」の結果と言える。ベアトリスはその花々の、「人間の姿をした姉妹」であり、彼女と花とは一種の血縁関係にある。それを踏まえれば、ベアトリス自らも神の所産ではない可能性が浮かび上がってくる。また、ジョバンニがこの庭を「現代世界のエデン」と称していることも注目に値する。神の創造的空間であるエデンに対し、「人間の頭脳」によって誕生した庭が「現代世界のエデン」と表されることは、「現代世界のエデン」の主は神ではなく、人間であるという想像を生み出すのである。そこに、花々同様に、その「姉妹」であるベアトリスが象徴的に科学的手法によって創造された「サイボーグ的」存在であることを喚起する根拠の一つがある。

Donna Haraway によれば、サイボーグとは「私生児的」でもあり、「脱性差時代（ポスト・ジェンダー・ワールド）の世界の産物」でもあると定義される。これらはベアトリスに奇しくも当て嵌まる。ベアトリスの「姉妹」と言える植物のひとつは、「ラパチーニの科学の、彼の知性の子」と表され、本来の自然界には存在しない、彼の科学的技法による人工的産物である。一方ベアトリスは自らを「父の現世的な子」と称するが、作品にて母の存在は語られることなく、彼女が母の子宮から誕生した子供であることが曖昧化されている。逆に作品ではベアトリスが母乳ではなく、毒草を糧に育てられたことが強調されている。この母親の不在あるいはその希薄さと、ラパチーニによってベアトリスが「毒娘」「怪物」へと変貌させられたことを

重ね合わせると、彼女はむしろ父＝男＝科学者の科学的所産であるとの幻想が浮かび上がってくる。象徴的に言えば、ベアトリスは母の子宮ではなく、男／科学から生み出されたマスキュリンな産物であり、それゆえ「私生児的」と呼ぶことが可能であるかもしれない。

「脱性差時代の世界の産物」という点も、ベアトリスの性質と合致し得る。ベアトリスは外見的には美女であるが、毒を感染させ死に追いやる危険性があるため、恋人ジョバンニとの接吻はおろか身体的接触も能わず、彼との間にヘテロセクシャルな関係を構築することが出来ない。ゆえに彼女には処女イメージが付き纏うが、それは彼女が世話をする雑多な毒草の生殖に纏わる描写とは対照的である。毒草は「神の創造物」でなく、「異種なる植物」同士が交配され、「姦淫」によって生み出された「合成物」であり、モラルを逸した性的交渉の過剰さをイメージさせる。「現代世界のエデン」はベアトリスにみるように男女の生殖行為が抑圧された状況と、常軌を逸するほどの過度な性的営みが行われている状態、つまり生殖の欠如／過剰の、極端な形のセクシュアリティに支配され、一種のジェンダー・トラブルが惹起されている。その空間で、ベアトリスが最後に解毒剤を飲むことは、彼女が「怪物」から「普通の女性たち」の一人になり、抹消された女性性を回復することを意味する。しかし、毒を養分とするベアトリスの身体からの毒の排除は、その生命の源を否定することに他ならない。裏返せば、ベアトリスは毒の充満する「現代世界のエデン」でのみ生存可能であり、毒の存在しない世界で、男性とのヘテロセクシャルな関係を築くことが出来ないのである。そこにハラウェイが主張する「脱性差時代の世界の産物」としてのサイボーグ・イメージと、ヘテロセクシャルな関係構築が許されず、女性性を抹消された「怪物」としてしか生きることの出来ないベアトリスとの共通点を見出すことが可能であろう。

(5)『檻の中』にみる電信ネットワークと意識の拡張

Henry James の中編 “ In the Cage ”(1898)は、富裕層が住む地域の郵便局に勤める女電報技手を主人公とした中編であり、従来この作品は上流／下級階級の階級差を下敷きとする社会的作品と見做され、比較的評価の低い作品であった。しかし、この小説をオルタナティヴに読み替え、作品に潜在する電気的イメジャリーを抽出すると、そこには全く異なる側面が浮上してくる。＜電信の檻＞に囚われた女電報技手が電信ネットワークとの恒常的接触によって感覚が麻痺していく過程を描き出す作品としての姿が露わになるのである。つまり、Marshall McLuhan が主張するような、全世界的な通信ネットワークと人間の神経ネットワークの想像的接続、それに伴う意識の変容や感覚の拡張と、同時に惹起される内／外、主体／客体といった二項対立的世界の脱構築／溶解、電報という断片的な言葉の集積に基づく仮想的世界の構築といった事象が描き出され、「モルモット」と称されたこの女主人公は電気的メディアの影響力を物語る一つの実験台としての役割を帯びている。この作品を Katherine Hayles は、「20 世紀の情報をめぐる物語の前編」と称したが、それは今日のインターネットによって引き起こされる現実と仮想現実のボーダレス化や情報過多による感覚の麻痺といった問題を振り返れば、両者は根本的な問題を共有していることは明白であり、本作品は現代メディア史を語る上で、その端緒となる作品と言える。

<まとめと総括>

ゴシックの手法は「語る／信じる」ことの出来ないものを過去に位置づけることで語る方法としてロマン主義の時代において魅力的であり、サイエンス・フィクションも「語る／信じる」ことの出来ないものを未来に据えることで、現代の読者に同様の魅力を有している。C. R. Resetarits によれば、ゴシックのジャンルに属する「超自然的」(supernatural)な出来事は、サイエンス・フィクションの「超科学的」(superscience)な出来事に変換され得ると述べている。それを敷衍すれば、19 世紀中葉のゴシック・ロマンス的小説とサイエンス・フィクションは、各々「超自然」と「超科学」という名のもとに「語る／信じる」ことの出来ないものを「語る」ことで共通しており、ゴシック・ロマンス小説をサイエンス・フィクション的に読むことで、新たな解釈の地平を生み出す可能性が伺える。

一方、19 世紀末の文学作品では、電信にみるように、今日実際に利用されているテクノロジーの原初的形態が登場してくる。この<新しく>かつ<古い>テクノロジーの影響に焦点を当てると、人間の身体／意識の拡張やバーチャルな世界の構築を生み出す今日のテクノロジー偏重の世界と通底する問題を扱っていることが分かり、19 世紀の文学作品に 21 世紀にまで至るメディア・テクノロジーの系譜の前編を形成する役割が期待できる。

このように、19 世紀の文学作品に内包される（非）現実的な科学技術の所産を糸口に再読すると、現代テクノロジーの進展によって生じる現代の・未来の問題を、作家が自らの文学的想像力によって、既に語っていることが分かる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　3　件）

①中村善雄「ホーソーンはサイエンス・フィクションの夢を見るか」『エコクリティシ

ズム・レビュー』9(2016):pp.38-46.(査読無)
②中村善雄「「美の芸術家」にみる機械論的世界―ホーソーンのオートマタ」『ホーソーン研究』2(2015):pp.41-45.（査読無）
③中村善雄「機械身体の考古学―ナサニエル・ホーソーンとテクノロジー」『関大英文学－坂本武教授退職記念』(2015):pp.173-188.（査読無）

〔学会発表〕（計　10 件）
①中村善雄「『アトランティック・マンスリー』にみる文学的潮流―ローウェル、フィールズ、ハウエルズ」日本ナサニエル・ホーソーン協会中部支部研究会、2017 年 12 月（於：東海学園大学栄サテライト）
②中村善雄「劇作家 James の「誕生」―“dramatic years”以前の戯曲」アメリカ演劇学会第 7 回大会シンポジウム、2017 年 8 月（於：広島経済大学）
③中村善雄「機械が奏でる音と書くことへの侵入性―Henry James の口述筆記」第 4 回異文化間情報ネクサス学会年次大会、2016 年 12 月（於：東京電機大学）
④中村善雄「ホーソーンの短編におけるポスト・ヒューマン的想像力」日本ナサニエル・ホーソーン協会関西支部例会、2016 年 11 月（於：関西学院大学梅田キャンパス）
⑤中村善雄「ホロコーストに見るユーモア」第 27 回日本ユダヤ系作家研究会シンポジウム、2016 年 3 月（於：ノートルダム清心女子大学）
⑥中村善雄「ホーソーンはサイエンス・フィクションの夢を見るか」エコクリティシズム研究学会第 28 回大会シンポジウム、2015 年 8 月（於：広島市立大学サテライトキャンパス）
⑦中村善雄,「ホーソーンとジェイムズ―独立戦争・南北戦争・第一次世界大戦―」日本ナサニエル・ホーソーン協会第 34 回全国大会シンポジウム、2015 年 5 月（於：日本大学文理学部）
⑧中村善雄,「異性装の政治学―エレン・クラフトの奴隷体験記」第 30 回異文化間情報ネクサス学会定例研究会、2015 年 4 月（於：順天堂大学）
⑨中村善雄,「「食」から読むアメリカ文学」アメリカ文学会関西支部例会シンポジウム、2014 年 11 月（於：京都府立大学）
⑩中村善雄,「「ヘンリー・ジェイムズにみるメディア・テクノロジーと情動／意識の変容―電灯、電信、タイプライター―」九州アメリカン・ルネサンス研究会夏季セミナー講演、2014 年 8 月（於：大丸旅館）

〔図書〕（計　8　件）
①中村善雄，他、『ユダヤ系文学と「結婚」』彩流社、pp.55-74.
②中村善雄，他、『身体と情動：アフェクトで読むアメリカン・ルネサンス』彩流社、2016、pp.145-162.
③中村善雄，他、『ホーソーンの文学的遺産―ロマンスと歴史の変貌』開文社、2016、pp.357-377.
④中村善雄，他、『ヘンリー・ジェイムズ、いま―没後百年記念論集―』英宝社、2016、pp.157-175.
⑤中村善雄，他、『ホロコーストとユーモア精神』彩流社、2016、pp.243-261.
⑥中村善雄，他、『エコクリティシズムの波を越えて―人新世の地球を生きる』音羽書房鶴見書店、2017、pp.216-230.
⑦中村善雄，他、『ユダヤ系文学における聖と俗』彩流社、2017、pp.209-226.
⑧中村善雄，他、『アメリカ文学における幸福の追求とその行方』金星堂、2018、pp.311-330.

〔その他〕（計　6　件）
①中村善雄「（ポスト・）ミレニアムのホロコースト映画にみる記憶と表象の可能性」ユダヤ系作家協会 *Shlemiel* No.17　2018 年 3 月、pp.37－39.
②中村善雄「Jazz Singer（1927）にみる「聖」と「俗」の対立とその和解」ユダヤ系作家協会 *Shlemiel* No.16　2017 年 3 月、pp.63－65.
③中村善雄「読者の声」「文学研究のパノラマ的展開」日本マーク・トウェイン協会『マーク・トウェイン―研究と批評』第 16 号 2017 年 3 月、pp.122－123.
④中村善雄“Henry James and World War I”日本ナサニエル・ホーソーン協会 *NHSJ Newsletter* 34　2016 年 2 月、pp.11-12.
⑤中村善雄、西山智則著『恐怖の君臨－疫病・テロ・畸形のアメリカ映画』（書評）日本英文学会『英文學研究』第 92 巻　2015 年 12 月、pp.147－150.
⑥中村善雄「大衆文化と 19 世紀アメリカ文学にみる視覚の変容に関する学際的研究」「基盤研究（C）・科研研究成果報告書」2014 年 5 月、pp.1-5.

６．研究組織
(1)研究代表者
中村　善雄（NAKAMURA YOSHIO）
ノートルダム清心女子大学・文学部・准教授
研究者番号：００３６１９３１

(2)研究分担者
（　　）
研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）
研究者番号：